藤沢市政策研究室
ニュースレター

2008. 9 Vol.34

Contents

■ 今月の話題　たまにはメディア批判もしてみよう（内向・引きこもりの国際報道）
■ 研究室からの風
■ 書籍紹介　上田誠（2006）「エンジョイ・ベースボール」

■ 今月の話題　たまにはメディア批判もしてみよう（内向・引きこもりの国際報道）

以下はフランスの新聞報道からの引用です（9 月 23 日～24 日に掲載された記事）。誰についての報道だか、お分かりになるでしょうか？

出身は政治的名家（Dynastie politique：Le Monde 紙）であり、外交・安全保障政策においては Nationaliste（国家主義者：Le Figaro 紙）、あるいは"Faucon"（タカ派：Le Monde 紙）。国内政治手法については Populiste de droite（右派の大衆主義者：Le Monde 紙）。その政治手法を間接的に支えているのが、外務大臣時代につけられた"Ministre du manga"（マンガ大臣：ほぼ全紙）という呼称であり、son appartenance à la "tribu des otaku"（オタク族への所属：Courrier international 誌）といった特徴である。

簡単すぎちゃいましたね？前半部分の特徴だけならたくさんいますが、後半の特徴はユニークですから。そうです、もちろん麻生太郎氏です。22 日に自民党総裁に選出され、国会での首相指名選挙を経て日本国総理大臣になるということで、フランス・メディアの注目も殺到したのです。

ただしフランスの場合、注目は一時では終わりませんし、表面的な事実だけの報道にもなりません。国際的な事象に関するフランスの報道は、常日頃から非常にきめ細かく、しかもそれぞれの国の文化や社会構造について理解した上で深い考察に基づいて執筆されています。

したがって麻生氏についても、首相になるという単発の記事だけではなく、いくつか関連する記事が掲載されています。例えば Le Monde 紙は、麻生氏が政治的な名家の出身という点を入り口として、日本政界がいかに名家の血統によって占められているかを明らかにしています（記事名"Au Japon, la politique est une affaire de famille"（日本では、政治は家系（名家）の事柄））。そこでは安倍、福田、麻生と 3 代続く 2 世総理大臣はもとより、わが国でも今やあまり語られなくなった鳩山家、鳩山一郎氏以来の動向までもが紹介されているのです。

さて、そろそろ本題です。翻ってわれわれの身近にある記事はどうでしょう？国際的なニュースで何か覚えていることはありますか？もっぱら一時的な関心事である選挙結果や、重大性の高いテロ・独裁政治・民族対立、これら以外の記事をみたでしょうか？事実報道だけではなくて、社会のあり方や価値観を考え直す機会になるような、深い洞察に満ちた記事はありましたか？

今回ここでお伝えしたいのは、フランスがどうこうではなく、わが国メディアのレヴェルがあまりにも低いことです。グローバリゼーションといいながら、アメリカの事象ばかりが記事にされ、しかもわが国にとって関係のある事柄だけが取り上げられています。わが国にいて、わが国のメディアだけをみていると、多方面かつ多次元の国際関係を体系的に理解することも、特定の国をじっくり理解することも難しいのが現状なのです。　（政策研究室　青木　宗明）

なんでつながっているの？

近年、地域コミュニティ復活の処方箋として、地域 SNS と呼ばれるサービスが注目を集めている。ご存じの方も多いかと思うが、SNS とは、少し乱暴な言い方をするとインターネット上の友だちクラブだ。利用者は、自分の友人を登録することでその友人がサイト上に記したプロフィールや日記、その友人の友人等が閲覧可能になる。そのような情報の閲覧を通して友人たちの近況を知ったり、好きなテーマを題材にしたグループに所属して語り合ったり、趣味の合う人を見つけて新しく友人を作ったり出来る。サービスの利用者の紹介がないと新規登録出来ない紹介制のサービスが多いのも特徴の一つで、この特徴の為、他のインターネットサービスよりも利用者の安心感が強いとも言われている。日本では 1500 万人超のユーザ数を誇る mixi(ミクシィ)というサイトが一番人気だ。

地域 SNS とは、全国規模で展開されている SNS が多い中、あえてそれを地方自治体（多くが市町村）単位で独自展開したものだ。SNS に地域情報や地域内でのネット上のコミュニケーションを集約することで、薄れつつある地域内での繋がりを再生し、作り出し、維持していくことが期待されている。その意味において、藤沢市が全国的な先進事例として展開してきた市民電子会議室とは位置づけが異なる。市民電子会議室とは意識ある人の議論の場であるが、地域 SNS は地域に暮らす人の日常生活を緩く繋げる為の場なのである。

このように、行政が提供するインターネットサービスの中で独自の地位を獲得しつつある地域 SNS だが、本格的な展開を考える上ではまだまだ解決すべき点も多い。中でも、最も単純で大きな課題となるのが、その運用目的の設定である。地域の人々をそこに集めることは確かに目的なのだが、それだけでは地域コミュニティは作れない。そもそも地域コミュニティには生活の上で必要な機能が埋め込まれており、だからこそ人々は皆そこに参加し、持続的なグループとして存在してきたのである。地域 SNS の中に、地域で必要とされているどんな機能を組み込んでいくのか。今後も動向を注意深く見守っていきたい。

（政策研究室 天笠　邦一）

スリムビューティー・・・？

暑い夏も終わり、夏バテ気味の職員の皆さんも多いのではないでしょうか？“食欲の秋！”これからは、「食」という点では最高の季節となり、今までとは違う意味（肥満等）で心配な時期となってきます。

さて、先日ある番組で「ダイエット」について、紹介しておりました。皆さんも今までにチャレンジしたことがあると思いますが、リンパマッサージ、ダイエット運動、バナナダイエット等多種多様なダイエット方法を芸能人が体験し、その成果を発表しておりました。どの方法もそれなりの成果が出ており、私もその中の一つである「バナナダイエット」に翌日からチャレンジをすることにしました。この方法は、毎朝 2 本のバナナと水を食し、食後３０分以降は何を食べても良いというもので、また夜は就寝４時間前に夕食を済ませるという方法です。早速、翌日スーパーでバナナを購入しに出掛けたところ、過去にもテレビ放映の翌日に品薄状態となった納豆、寒天等と同様に、何とどのスーパー（４、５店舗回りましたが）もバナナが売り切れの状態でした（ただし、翌日朝一番で購入できました)。“熱しやすく冷めやすい”・・・日本人（自分を含め）の悪い習性？を改めて痛感しました。

メタボ検査も今年の職員健診から始まりました。体は資本！自己管理に徹し、日々の業務に取り組むことを願いものです。（また、いつの日か変身した私に会える日を楽しみにしていて下さい。）

（政策研究室　福岡　浩一）

「藤沢」の矜持,「藤沢」の品格

先日，藤沢駅南口にある音楽ホール「藤沢リラホール」の経営者にお話を伺う機会があった。第１回ふじさわ都市デザイン賞も受賞した美しく機能的なホールであるが，素晴らしいのは，その造作だけではなく，２００席の小規模コンサートホールにもかかわらず，スタインウエイ社製のフルサイズのコンサート・グランドピアノがあるうえ，ホールの音響設計が大変すばらしいのである。世界の名だたる演奏家がここで演奏会を開き，東京などの著名なホールよりも藤沢のここで演奏したい，という声もあるくらいだそうである。

気になったのは，なぜここまでこだわりぬいてホールをつくったのか，ということと，このホールの名称が「『湘南』リラホール」ではなく「『藤沢』リラホール」なのか，ということである。伺ったところ，経営者は藤沢に生まれ育った方で，よいホールをつくり「藤沢」の名を冠することで，「藤沢の街にはよいホールと音楽がある」という印象をより明確に印象づけたかったのだという。そしてその前提には「本物」をつくることがなければならない。いい加減なものであっては「所詮，藤沢ではこんなものか」となってしまうし，市民にとってもその存在が誇れるものとはならないからだ，との由。

このお話に大変感銘をうけたと同時に，これまで十余年奉職してきて，自分は「本物」をきちんと市民に提供してきたのだろうか，己の仕事を省みて恥ずべき点はないか，と帰宅して就寝するまで考えさせられた。

近年，藤沢は建設関係の事件を中心になにかとネガティブイメージが伝えられる。それらに抗い，なおかつ払拭するためには，軽薄にながされることなく「本物」を創り，護り，伝えていくこと以外に道はない。改めて肝に銘じた次第である。

なお，このインタビューの模様は近日発行の研究誌「藤沢政策研究」第５号に収録される予定となっている。乞うご期待。

（政策研究室　稲田　俊）

研究室からの風

財政赤信号？

読売新聞社の報道によると、地方自治体財政健全化法に基づく財政指標で 2007 年度決算を見た場合、6 市町村が「財政再生団体」（赤信号）の状態に、38 市町村が「早期健全化団体」（黄信号）の状態にあるという。これらの多くは、連結実質赤字比率等、普通会計以外の会計も対象とした指標が基準を超過したことによって灯された「シグナル」であるようだ。

このことから、新しい財政指標が、普通会計のみを分析していたのでは見落としてしまいがちな自治体財政の状況を反映していることがわかる。この点については、新しい財政指標は高く評価されるべきであろう。しかし、例えば、公営事業会計等を用いて行われてきた事業が病院であっても交通事業であってもその他であっても同じように合算されて評価されるシステムに対しての違和感もぬぐい去れない。不必要な事業を行った結果累積した財政赤字の帳尻を合わせるために、必要ではあるが黒字になりにくい事業が切り捨てられてはいないのだろうか。自治体ごとに事情が異なり指標化できないこれらの点をどのように評価したらいいのであろうか。（政策研究室　其田　茂樹）

■　書籍紹介

上田　誠（2006）『エンジョイ・ベースボール～慶應義塾高校野球部の挑戦～』
NHK出版（生活人新書）735円

先の夏の甲子園は第90回記念大会。神奈川県は２校出場ということで南北に分かれての県大会を行った。北は慶應義塾高校，南は横浜高校からそれぞれ出場し，両校とも本大会で熱戦を繰り広げた。

特にこの夏，神奈川で話題を呼んだのが，46年ぶりに夏の大会に出場した慶應である。県大会決勝における東海大相模高校との延長13回の死闘は球史に残る名勝負。そして甲子園本戦でも慶應はなんとベスト８まで勝ち進み，最後（準々決勝）は沖縄県立浦添商業高校と延長10回の死闘を演じた。強豪揃いの神奈川県で，県大会で勝ち上がることそのものが長年話題になっていたような学校がどうして近年強くなったのか。それが，藤沢市出身・在住でもある同校英語科教諭兼硬式野球部監督の上田誠氏による型破りの指導法であったといわれている。そんな著者の，これまでのトライアンドエラーの繰り返しの中で掴んでいった指導法や，野球哲学をまとめたのが本書である。

私は少年野球も学生野球もやったことがないので，学生野球で鍛えられた諸兄の前で指導法や野球哲学の内容について論じることはできないが…そんな私が本書を読んで感じたことは，ミッション（本書の場合は高校野球）を通じて「育つ」「育てる」ということはどういうことか，という普遍的な課題がその根底に流れており，これは仕事術にも通じるところがあるのではないか，ということであった。立場によって読み方は違うと思うが，私のような「選手（＝一般職員）」の立場にあっても，仕事において，著者の説くような「エンジョイ」の境地に至るために，何を要し，何を為すべきかということを考えさせられた。

ここで一つ補足すべきは「エンジョイ」は，決して「プレジャー（娯楽・快楽）」の意味ではないということである。「技術」を獲得していくために科学的かつ合理的な練習の積み重ねが必要であり，その結果培われた技術に裏打ちされた「精神力」があり，対戦相手や置かれた局面を冷静に分析していく「情報分析力」があり，そしてその先に至る境地，即ちこれら積み重ねた実力を着実に発揮して、結果を出す満足こそが「エンジョイ」ということである（著者が説く「胃液を吐くプレッシャーを楽しめ」という境地は，プレジャーの世界ではあり得ない）。

慶應も含めた各校の甲子園の熱闘を観戦し，それを通じて感じ入るところが多かった今夏。改めて本書を読み返して，是非若手職員の諸姉諸兄，特に（自分もその一人なのだが）仕事で「壁」を感じている人に読んでいただければ，と思ってご紹介させていただいた。それこそ「胃液を吐くプレッシャー」の中で，事態に正対しつつ，それを乗り越えた先の「満足」を目指し，日々を積み重ねていくためにも。

最後に著者が生徒に説く部訓の中から３つほどご紹介したい。曰く「自分の評価は自分でしろ。人の目、人の評価を気にしてばかりいるとパイプが詰まる」「雨と風と延長とナイトゲーム、そして決勝戦には勝つ」そして，「エンドレス（いつまででもやってやろうじゃないか）」　　（政策研究室　稲田　俊）

藤沢市政策研究室
ニュースレター
Vol. 34 / 2008年9月発行

編集・発行　：経営企画課 政策研究室（本館２階）
TEL　：（内線）2173　（直通）0466 －50 －3517
E-mail　：research@city.fujisawa.kanagawa.jp

藤沢市政策研究室ニュースレターは、地方自治に関する最新の情報や政策動向を伝えるため、職員向けに毎月発行しています。
掲載した内容は、研究員の個人的な見解です。